2020年度　入門講座

**第31課　結婚の秘跡**

家族の中の私

　自分が存在するのは**両親**がいたから、「わたし」という存在はまさにこの両親から生まれた。だれも自分で親を選ぶことはできない。「わたし」と言う人物が、ある両親から、ある時期に、ある特定の場所に生まれてきたということは**不思議**なこと、なぜと問いかけても説明できない事実である。

しかし、自分という人間が今、ここに生きているということは偶然のことだろうか？自分の存在は、人間にはどうにもできない不思議な法則によって生まれてきたのである。

新しい人間が生まれるということは不思議で神秘的事実。生殖医療の分野が命の領域に踏み込もうとしているが、父なる神が、両親の人間的な創造力を通して、わたしという人間をこの世に存在させてくださったのである。これから入る結婚の、そして家族というものの大切さを再確認しよう。

Ⅰ　結婚の根源的な意味　―なぜ結婚するのか―

結婚はある国、ある種族、ある宗教、ある時代の特殊な制度ではない。法律以前の習俗に含まれる法則の一つである。

　　＊時代や文化の違いによって形の変化はあるが、結婚のない人間の社会はない。

結婚とはそれぞれの文化において人間をどうとらえるか、男女の性をどう見るかによって、

考え方が変わる。

（セネガルの例、一夫多妻（２人まで）か一夫一妻　結婚式の場で夫が選ぶ。）

＊日本の社会通念では、適齢期に達したら結婚するというのが当然のことである。

先に見た聖職者の道や奉献生活の形も人生におけるライフスタイルの一つであるが、結婚はその根本的なものである。

聖書における結婚の意味

１．神は結婚を祝福される。

イエスは最初の奇跡を婚宴の場で行った。（ヨハネ2：1－12）

　　**イエスが最初に栄光を表されたのは神殿でもなく教会でもなく、山の上でもなく結婚式だった。プライベートな家庭の祝いに席だったということに注目**。

イエスも母も婚礼に招待されていた。祝宴の半ばでぶどう酒がなくなってしまった。するとイエスは水を上等なぶどう酒に変えてふるまった。そのおかげでこの婚礼は危機を脱しただけでなく、いよいよ盛り上がっていった。婚礼という喜びの席で、飲んだり食べたりしている人々を白けさせないために、御力を発揮してくださったのである。**結婚はそれほどに大きな意味を持つ重大な出来事であり、人間が生きる上での最も根本的な「愛」のかたちである。**

\*「ブドウ酒がなくなりました。」当時結婚式でぶどう酒が不足するということは、花婿の家にとって大きな恥であったろう。母マリアの気づきによってその家にとっての危機が救われる。

\*「この人の言う通りにしてください」イエスは母の信頼に応えた。

ここでイエスは水をぶどう酒に変えられた。確かに人間業ではなく神業、不思議で素晴らしいことであるから奇跡と呼ぶ。神の栄光を見た弟子たちはイエスを信じた。

イエスは水をぶどう酒に変えて、この婚宴を祝福しようと考えた。その心だけで、奇跡が起こった。それはイエスがわたし達の家庭を祝福し、男女の愛や夫婦の愛を祝福し、新しい人生の門出を祝わってくださるしるしである。

\*希望を与えてくれる奇跡

汲んでも汲みつくせないブドウ酒が放つ香りで心が豊かになる。

ブドウ酒の欠乏というのは、**家庭や心のなかで、愛や喜びというものが底をついてしまうようなときの絶望感を象徴している**。そのような時、イエスはわたし達の心にブドウ酒を与えて下さるということであろう。神にはできないことはない。互いに限界を持った人間同士、愛する力を失うこともある。家庭の人間関係が難しくなった時、「主よ、ブドウ酒が足りません」と言ってみよう。

２．「ご自分に象って人間を造り、男と女に造られた。産めよ、増えよ、地に満ちよ、地を従わせよ。」(創世記1：27－28)

聖書は、神の似姿として造られた人間に刻まれた人格と性を切り離せないものとして捉えている。結婚は人間が作り出した制度ではなく神が結婚の創設者である神法である。カトリック教会は、人間に備った自然的傾向である結婚を、神の意志を表すものとして祝福しその尊さを保護する。したがって男女は一つの共同体を形成し、肉体的だけでなく、精神的、人間的にも一体となる。

　自然法に基を置く重要な社会制度である。結婚の意味重大性は普遍的なもので、キリスト者で

ない人にとっても、人生における決定的な出来事なのである。結婚のない人間の社会、結婚という制度のない人間社会はない。時代や文化の違いによって形の変化はあるが、ある意味で、寝たり食べたりするのと同じくらい当たり前なことである。

1. 結婚の尊さ：マルコ10:6～9、（マタイ19:3-12）

「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。したがって、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」

イエスは、結婚制度を尊重し、結婚の絆を断つことができないものにした。なぜなら、結婚において互いに自分を譲り合うので、それ以上の重要な絆はないからである。

1. 結婚とキリストの教会に対する愛：エフェゾ5:21-32

パウロは、結婚をキリストの教会に対する愛にたとえている。夫婦の一致はキリストとその教会との一致にたとえられるほど聖なる神秘的なものだからである。夫婦生活においても十字架に等しい苦しみはある。失望、失敗、フラストレーション、しかし、イエスの十字架に続いて復活の喜びがあったと同様に、夫婦にとっても、信仰に基づいていれば、希望や支えの喜びがある。

 参照　\*教会法典 (1055～1165)　教会法は結婚生活にかなりの配慮。100を超える条文

\*『現代世界憲章』47-52

 \*ヨハネ・パウロ２世『家庭』1981

Ⅱ　結婚における神の制定としての側面

1. 結婚の本質；資格ある男女による愛と生命の絆に基づく結合であり、彼らは特別の共同体を構成する。

「男女が相互に全生涯にわたる生活共同体を形成するために行う誓約」（1055）

男女が互いに助け合い人格的完成を目指す夫婦愛と子どもの出産、教育、社会善を目指すものである。

1. 結婚の特性

結婚の単一性　（1056）　（一人の男性と一人の女性の結合）

　　　　　結婚の不解消性　（1134）

一度正しく結婚を締結すれば、両配偶者が生きている間続く。永続的で排他的な絆が生じるということである。教会は離婚を禁止しているのではなく、神が結び合わせたものを解く力がないということなのである。

* 「婚姻無効訴訟」と呼ばれる規定
1. 年令（男16女14 以上、日本民法男18,女16歳）
2. 身体的に健全でない。
3. 前婚の絆
4. 異宗教
5. 暴力（外からの恐怖）
6. 血族（直系と４親等まで）
7. 合意が成立しない（知的能力、心理的理由、性格など重大な誤解、一夫一婦制、不解消性を受け入れないで挙式・・・
8. 結婚の目的；夫婦の善、人格的成長および子どもの出産と養育、教育。

　配偶者同士の個人的面＝夫婦の助け合いと人格的完成。

　人類の存続＝次の世代を担う子供を産み育てること。

＊子供ができない場合；「結婚は子供を産むためだけに制定されたものではない。

　　　二人の人間の間に、夫婦相互の愛が正しい方法で実行され、育ち成熟することを

目的とする。したがって、熱望する子どもが与えられない場合にも、結婚は全生涯の生き方および交わりとして存続するのであり、結婚の価値と不解消性は持続する」（現代世界憲章５０項）。

子どもは親の「もの」(所有物)的な考え方から、堕胎も親の意志次第、離婚も子どものことを考えずにしてしまうケースが少なくない。

1. **秘跡性；信徒同士の婚姻は秘跡の尊厳が与えられる。結婚の秘跡は結婚する**

**二人が相互に授けあう。**(司祭は証人)

届け出だけで結婚でき、届け出だけで離婚できる協議結婚の罠、諸外国と比較すると日本の制度は安易と無責任を助長する危険がある。

Ⅲ　結婚する者同士による選択・判断・決断

1. 結婚するか、しないかを自由に決め、相手を自由に選ぶ。
2. 人格的な同意・合意であること。

Ⅳ　結婚の霊性

1. 夫婦の愛は創造的でゆるしと和解をもたらす。最後まで忠実である。

結婚は一生をかける愛の一つのスタイル「死が違いを分かつまで」愛を生きる。

　　　　相手をありのままに受け入れ、互いに不完全なまま愛する。

1. 相手に自分の全てを与え相手の全てに与る。

夫婦であるとはトータルなこと。からだと心を含んでトータルに愛する。結婚する時、お互い同士が自分を相手に与えること自分を犠牲にしても相手に尽くすことを初めから覚悟しておく必要がある。

他者を愛する人間になる条件は自己受容である。自分を受け入れて正しく尊重し愛すること、つまり自分に出会うことが基本条件である。

1. 聖性をめざして互いに成長する。

どんなに優れた人であっても限界がある。独りの人間から期待できる限界にぶつかる。愛するということはそこから始まる。キリスト教が言う愛の領域は、ある意味で孤独の領域でもある。

「愛の賛歌」Ⅰコリ13:1-7

最も優れた道、人が生きているのは愛するため、それ以上はない。

　　　　**「愛は寛容、情け深い、妬まない、高ぶらない。全てを信じ、全てを望み、全てを耐える」**

　　　　　愛するということは自分の殻を出ること、殻を出てその相手を突き抜けて神に向かう態度。

1. 自分の家族だけに閉じこもらないで、社会に開かれた家庭である。

結婚を私的なこと、自分たちの意志で決められること、したがって自分たちの意志で終わらせてもよいと考えている人が多い。好きだから結婚する嫌いになれば無理に一緒にいる必要はないと、無意識に考えている人もいる。しかし、結婚は私的なものではなく、社会的には契約であり、教会的には誓約である。結婚は社会と教会の最小単位、共同体的に社会全体に影響を与える。

質問 ①　結婚しようとする相手がキリスト者でない場合どうしたらよいか？

相手がキリスト教のことを知っていようがいまいが、あなたのことを真に大事にし、信仰の自由を尊重する人でなければならない。信仰は人間の人格の深い次元に関わるもの。あなたの生き方、考え方を尊重しそのために協力することを約束してもらう。

1. キリスト教の人とは結婚できないという人との結婚はどうすればよいか。

自分がキリスト者であることを隠してまで結婚するようなことはしない。そのような結婚が幸福をもたらすことはないから。

1. カトリック信者は教会で結婚しなければならないか。

　　　　神の前で祝福を受けることだからできるだけそうするのが好ましい。もし家の事情で、他の結婚式を挙げなければならないなら場合は、主任司祭と相談して、教会で簡単な形での式をあげることができる。教会で、二人だけで結婚の誓いを交わすことに意味のある。

カトリック教会ではなぜ離婚を認めないのか？

カトリック教会では結婚の誓いを神聖なものとみなしている。一度結ばれた夫婦の絆を解くことは誰にもできない。このような厳しい法が定められているのは、結婚を秘跡として尊重するからである。（教会法に結婚の不解消性ということが定められているのはこのため。）結婚する前に初めから真剣に考えて、相手の人とよく話し合っておく。

＊離婚歴のある人がカトリック教会で再婚しようとすると、教会法上難しい問題になる。

　しかし、**教会は厳しいばかりではなく、救いを与えるのが教会だから**、司祭に事情を話

して相談するとよい。

＊無効宣言　婚姻の方式上の欠陥、または有効条件である合意の欠如

そもそも婚姻の絆が両者の間に生じてなかったと宣言。（最初から婚姻が成立していなかったという判断）

＊解消　正当な絆であっても法の規定（または教皇の権限）によりそれを解いて新しい結婚を可能にする。

**不幸な結婚によって傷ついている人とわがままから離婚問題を起こしている人とは問題が違う**。

1. 結婚準備

　教会の結婚講座；宗教的倫理的価値観、社会的、心理学的、医学的知識など、二人の関わりを深めるコミュニケーションの仕方など・・・

1. 結婚後夫婦の関わりを育てるための「マリッジ・エンカウンター」

　まとめ；

「結婚は一つの召命である。」（第二バチカン公会議）

キリストが教会を愛して、自分の命を懸けて渡したように、夫婦も献身的に変わるこ

とのない忠実をもって互いに愛し合いながら、人間としてキリストの背丈まで成長し

ていくよう招かれている。

召命とはある使命のために呼ばれ、それに生涯をかけて応える生き方を示すもの。犠牲を伴うことなしには果たしえない道である。

「なぜこの人と？」と、問われ続ける。結婚は常に動詞であり、なりつつあるもの。真の人間になるための終わりなき学び舎である。

自分の結婚観をまとめてみよう。

　結婚をどういうふうにとらえるか？最も意味ある結婚生活を送るには二人はどうあったらよいだろうか？

1. 夫婦の愛には厳しさも伴う。例えば意見の食い違い、衝突、喧嘩、相手を傷つけてしまったり、傷ついたりもする。そんな時どのようにゆるし合うことができるだろうか？

２）「夫婦が新しい生命を生み出し、育てていくことは、神の創造のわざに参与することである」と聞くとき、どのように感じるか？

３）「夫と妻の一致は人類家族全体を一致へと招く社会的意味を持っている」。

　　自分たちが社会に開かれた夫婦であるために、どうあったらよいと思うか？